様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２５０６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２７３０４０２

研究課題名（和文）ＥＰＡ外国人看護師・介護福祉士の異文化適応と異文化間看護・介護コミュニケーション

研究課題名（英文）EPA Foreign care workers' intercultural adaptation and communication in intercultural care settings

研究代表者
高本　香織（TAKAMOTO, Kaori）

麗澤大学・外国語学部・准教授

研究者番号：３０５５０２６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,600,000円、（間接経費）　480,000円

研究成果の概要（和文）：経済連携協定に基づき来日した外国人ケアワーカー（比人看護師）が、異文化適応の過程において経験しているコミュニケーションの問題は、彼女たちのアイデンティティの問題と深く関わっているということがわかった。不自由な日本語によるコミュニケーションを通じて過去の自分（優秀な看護師である本来の自分）と現在の自分（役立たず、”useless”な自分）との比較を強く意識せざるを得ない時、彼女たちはそのコミュニケーションを「問題」だと意味付けするのである。さらに、周囲の人々が自己イメージの回復を阻害したり助けなかったりした時に、そのコミュニケーションは「問題」として彼女たちに意識されるということがわかった。

研究成果の概要（英文）：Phenomenological interrogation revealed that communication problems experienced by foreign care workers (Filipino nurses) who came to Japan under the Economic Partnership Agreement deeply involve the issues of identity as they adapt to Japanese culture. When the communication experience in Japanese makes the nurses conscious about the two conflicting self-images - who they used to be and believe is their true self (a capable nurse) and who they perceive they are now (a "useless" nurse-to-be), they see the communication itself as problematic. Moreover, they see it as problematic when the way Japanese counterparts (patients and coworkers) communicate does not help them regain and reconstruct a positive self-image as a nurse in their everyday interactions.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：異文化コミュニケーション　異文化適応　外国人ケアワーカー　異文化間ケア

１．研究開始当初の背景

(1)背景：平成 18 年にフィリピン政府と、さらに 19 年にはインドネシア政府との間で経済連携協定（EPA）が締結され、平成 20 年度から、看護・介護分野への外国人労働者（外国人ケアワーカー）の受け入れが開始された。この EPA の動きによって、日本でも異文化間看護・介護（異文化間ケア）がより身近になろうとしている。しかし、高度な対人コミュニケーション能力が要求される看護や介護の現場で、言語と文化の障壁を乗り越えて外国人が質の高いサービスを提供することができるのだろうか―受け入れ開始前から外国人ケアワーカーの受け入れに対しては懸念の声が上がっていた。

(2)動機：EPA に基づく外国人ケアワーカーの受け入れは学際的な関心を集め、社会学、看護学、福祉、など、様々な学術的視点から調査が行われている。学際的なアプローチによる研究が進められているなかで、コミュニケーションに主眼を置き、異文化間ケアの現場で求められる対人コミュニケーションと相互適応の問題に焦点を当てることで、外国人ケアワーカーが実際に日常で経験する言語・文化・コミュニケーションの問題に関する理解を深めるため、本研究を行った。

２．研究の目的

前述の背景と動機で示したように、本研究の目的は、言葉・文化・慣習・価値観を学び実践できるようになる過程（＝異文化適応過程）及び、異文化間看護・介護の現場におけるコミュニケーションに焦点を当てた質的研究を行うことである。具体的には、異文化適応の過程における外国人ケアワーカーが周囲の日本人とどのようなコミュニケーションを行っているのか、また、どのようなコミュニケーションの問題を経験しているのかを調査した。異文化間ケアの実際の現場におけるコミュニケーションの本質的理解を深め、コミュニケーション学的視点から問題解決のための提言が行えるような知見を得ることを最終的な目標とした。

３．研究の方法

EPA に基づき看護師候補者・介護福祉士候補者として来日したフィリピン人ケアワーカーに半構造化インタビューを行い、文字化したデータを記述的現象学を用いて分析した。インタビューのトピックは来日前の看護師としての経験や来日動機、日本での生活、将来の計画など広範囲に及ぶが、その中で、「コミュニケーションの問題」が語られたエピソードを抜粋して分析の対象データとした。記述的現象学を用いることで、外国人ケアワーカーたちが個々に経験した「コミュニケーションの問題」の本質的構造が見えてきた。

４．研究成果

(1)研究の主な成果

①具体的な経験の例：外国人ケアワーカーが語ったケアの現場におけるコミュニケーションの問題とはどのような経験だったのか。具体例の一部を挙げると、物の名前がわからなかった（cotton は綿布、gauze はガーゼ、など）、食事の介助で、食べ物の説明ができなかった、コミュニケーションを取ろうと患者に日本語の質問をしたが微笑まれただけで答えてもらえなかった、治療に関して患者の心のケアができなかった、職場でコミュニケーションの輪から外された、などであった。しかし、いずれも患者の生命を脅かすような深刻なものではなく、患者や一緒に働くナースやドクターから何か失敗を指摘されたというものでもなかった。

②経験の本質的構造：それではなぜこれらの経験が彼女達にとっては「問題」として意味付けされてしまうのだろうか。記述的現象学的アプローチによって浮き彫りとなったのは、これらのコミュニケーションの経験が、彼女たちの自己アイデンティティ（特に、看護のプロとしての職業上のアイデンティティ）と深く関わっているということであった。つまり、不自由な日本語によるコミュニケーションを通じて過去の自分（＝優秀な看護師である本来の自分、経験豊富で以前は他の看護師を指導する立場にあったなど）と現在の自分（＝役に立たない自分、インタビュー中“useless”という表現が使われていた）との比較を強く意識せざるを得ない時、彼女たちはそのコミュニケーションを「問題」だと意味付けするのである。①で挙げた具体例のように、コミュニケーション上のつまづきは日常的に無限のバリエーションを持って経験される。しかし、問題なのはそのつまづき自体ではなく、根底にある彼女たちのアイデンティティ回復・再構築のためのストラグルなのである。

③アイデンティティ―コミュニケーション学的視点から：アイデンティティとは、周囲の人々との日々のコミュニケーションにより相互的・協働的に創出されるものであり、彼女たちが本来の自分を取り戻そうといくら懸命に努力をしても、相手の反応によっては意に反して否定的な自己イメージを見せつけられることがある。例えば、患者とコミュニケーションを取ろうとして話しかけたが微笑みだけを返されたエピソードでは、患者のこの反応を「自分が外国人だから信用されていないのだろう」と解釈していた。また、コミュニケーションの輪から外されることについて語ったケアワーカーは、自分がそのような扱いを受けるのは日本語ができないからだと考えており、そのような状況で「私はバカ(stupid)みたいだ」と自尊心が傷つけられ辛い気持ちになったことを打ち明けている。このように、患者や周囲のスタッフが、

彼女たちのポジティブな自己イメージの回復を（意識的にではないにせよ結果として）阻害したり助けなかったりした時に、そのコミュニケーションが「問題」として彼女たちに意識されるのではないだろうか。

④言語習得の重要性：さらに、彼女たちの語りで特徴的なことは、彼女たちがこの「問題」を乗り越えるためには「言語」の一刻も早い習得が不可欠だと考えている点である。EPA に基づく外国人ケアワーカー受け入れに関しては、「言語と文化の障壁」に関する懸念の声が挙がっていたが、彼女たちの意識の上では「文化」というよりも「言語」の習得が最重要課題であり、日本語さえマスターすれば、コミュニケーションの問題（つまりは自分のアイデンティティの回復・再構築）を乗り越えられると考えているようである。これは、彼女たちが持っている優秀な看護師としての知識・技能・経験を日本で活かせない理由が、「言語」の壁にあると考えているからであろう。国家試験に合格することはもとより、失ってしまった本来の自分を取り戻すためには、自分が優秀な看護師であることを周囲の人間に証明しなくてはならない。それには「言語」というコミュニケーションツールが必要不可欠なのである。もちろん、このことは異文化間ケアのコミュニケーションにおける「文化」的な理解や実践が重要ではないということを示しているわけではない。ただ、彼女たちにとって、今、一番差し迫った課題が日本語の習得なのである。言い換えれば、本来の自分を取り戻す為の唯一の手段が早急な日本語の習得なのである。

⑤現場への提言：前述のように、本研究においては、外国人ケアワーカーが経験するコミュニケーションの問題は、実際の患者のケアやその他の仕事とは別の次元において意識されるアイデンティティのストラグルと深く関わっていることが明らかとなった。アイデンティティは日常のコミュニケーションを通じて、常に相互的・協働的に創り出されているということをふまえると、本研究で明らかになった点について、現場の日本人一人一人が理解を深める必要があるだろう。彼女たちが本来の自分を取り戻し、自信を持って仕事に取り組むことができるよう、日本語の指導を重点的に行うことはもちろん、日常のコミュニケーションにおいても、意識的なフィードバック（彼女たちの職場での貢献を承認し、それを言葉ではっきり伝えること）を心がけるだけで、外国人ケアワーカーがもっと働きやすい環境を作ることができるのではないだろうか。

(2)国内外における位置づけとインパクト
EPA の外国人ケアワーカーを取り巻く問題は、学際的な注目を集めているが、本研究はコミュニケーション学の視点から現場の声を拾い上げ質的分析を行った。受け入れ開始前からあった「言語と文化の障壁が問題となりコミュニケーションが難しいのではないか」という漠然とした懸念について、実際にはどうなのかをコミュニケーション学的な見地から示すことができた。また質的アプローチを取ったことで、先行研究（量的研究が主）にはない知見を得ることができ、外国人ケアワーカーの問題に対する理解がより深まったのではないだろうか。

(3)今後の展望
①文化の障壁：EPA 外国人ケアワーカーが経験したコミュニケーションの問題は、「文化」の違いよりも「言語」の違いを強く意識した形で語られている。しかし、だからといって「文化」の違いはケアの現場におけるコミュニケーションに影響しないと結論することはできない。来日間もない外国人ケアワーカー達はまだ自由にコミュニケーションができるほどの日本語の会話力を持っていなかった。そのため、日本語習得に主眼が置かれてしまい、日々のコミュニケーションで文化的な違い（文化的価値、規範、慣習など）に遭遇したとしても、それらが隠れて見えにくくなってしまっていたかもしれない。もしくは、自分がコミュニケーションにつまづいているのは「言語」習得レベルが低いからとの強い意識から、本当は「文化」的な理解や技術が不足していたために起きた問題であっても、「言葉のせいだ」と決めつけてしまっていたかもしれない。また、「同じアジアの文化だから違いを感じない」と文化的距離を理由に、文化的な違いの存在自体そのものを否定するケアワーカーも存在した。このように、「言語」と比較すると「文化」を学ぶことがそれほど重要ではなかったため、文化的な問題は彼女たちの意識にそれほど顕著にのぼらなかっただけかもしれない。これらを踏まえて、今後の展望としては、外国人ケアワーカーの日本滞在歴が比較的長くなってきた段階でのインタビューを行い、言葉の問題が薄れてきた時に、ケアの現場のコミュニケーションにおいて、どのように文化の違いが経験され、時に「問題」として意識されるのかを調査していく必要があるだろう。

②異文化適応の過程：さらに、本研究においては、異文化に適応する過程で経験するコミュニケーションの生きられた経験に焦点をあてたため、異文化適応の過程そのものについての考察が不十分である。今後は、適応の実態そのものについても調査を進める必要があるだろう。

③国際的な視野：最後に、外国人による看護や介護は国際的には新しい現象ではない。すでに異文化間ケアが日常のものとして普及している国々から、日本での異文化間ケアの問題について学べることがあるだろう。今後

はより国際的な視野からの研究が求められる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①高本 香織、異文化間ケアの現場におけるコミュニケーション：EPA 看護師候補者の事例から、言語と文明、査読無し、Vol.12、2014、pp.21-23、
http://id.nii.ac.jp/1046/00000464/

②高本 香織、異文化間看護・介護とコミュニケーション：EPAに基づく外国人看護士・介護士の受け入れをめぐって、麗澤学際ジャーナル、査読無し、Vol.19、2011、pp.33-43、http://id.nii.ac.jp/1046/00000177/

〔学会発表〕（計３件）

①高本 香織、フィリピン人ケアワーカーの異文化コミュニケーション:現象学的アプローチ、日本質的心理学会、2013 年 8 月 31 日、立命館大学

②高本 香織、外国人ケアワーカーの異文化適応とコミュニケーション、異文化コミュニケーション学会、2012 年 11 月 11 日、麗澤大学

③高本 香織、外国人看護士・介護福祉士候補者の異文化適応とコミュニケーション、異文化コミュニケーション学会、2010 年 10 月 31 日、文京学院大学

６．研究組織

(1)研究代表者

高本 香織（TAKAMOTO, Kaori）
麗澤大学外・国語学部・准教授
研究者番号：30550264